納入先	日本局	工業家	朝鮮局	計	備考
昭和十一年	一	一	約三六、〇〇〇	約三六、〇〇〇	
〃十二年	一	一	約三二、五〇〇	約三二、〇〇〇	
〃十三年	一	一	一	一	
〃十四年	一	八、九〇〇	一	八、九〇〇	等変の為品質不良にして、積出不能

製精塩状況

支那事変勃発の翌十三年皇軍の青島占領と同時に永裕公司工場は軍に於て接収し、今年三月当社に其の委託運営の指令下附あり、諸準備を整へ六月より操業を開始す。

因に全工場年産能力

再製塩　一〇、〇〇〇瓲

粗滝塩　五、〇〇〇瓲

と称せられしも最近実際製造高は平均一万瓲に満たず、之が管理後も

事変に依る工場設備損傷等の為め能力半減せられて居り、目下之が修復中なり。

営業成績

(1) 貸借対照表（昭和十四年三月末現在）

資産

未払込資本金	六、七五〇、〇〇〇円
地所 家屋	四、四七九
機械什器	二〇、二四一
運輸設備	七、七一七
有價證券	八、三一三
貯塩勘定	一八七、九六六
貸付金	五五、八九二
増産奨励貸付金	二三四、三一一
假拂金	三三、八九八
受取未済金	一三、一九四

出張所勘定	、五九五
預ケ金	三、二八八、一一七
金銀	四、九二二
合計	一〇、六〇九、六四五
負債	
資本金	一〇、〇〇〇、〇〇〇円
信認金	、六六六
假受金	四三、六一〇
支拂未濟金	一四七、二一八
前期繰越金	五八三
当期利益金	四一七、五六八
合計	一〇、六〇九、六四五

(2) 損益計算書

支出	
塩買付代金及販賣諸掛	四、三九〇、五〇二円

営業費	二〇一、二七三
永裕塩田使用料	一〇、〇〇〇
増産奨励金	五一、五三四
当期利益金	四一七、五六八
合計	五、〇七〇、八七七
收入	
塩賣場代金	四、九五一、四八五円
増産助成金	四七、一四三
收入利息	七〇、二〇三
雑益金	二、〇四六
合計	五、〇七〇、八七七

山東塩業資本移動（單位千円）

昭和十二年二月	公称	一、〇〇〇
仝 年 四月	拂込	五〇〇
仝 十二年五月	拂込	五〇〇

昭和十三年五月　公称　一〇、〇〇〇
仝　年五月　払込　三、二五〇

十三、宏鑫採金股份有限公司

国籍　中華民国
設立年月日　昭和十二年七月二十日
本店所在地　北京内一区大方家胡同十一号
出張所　東京市日本橋区通り一六塩水港製糖株式会社内
営業種目　金鉱石の賣鉱及製錬
資本金　公称　三〇〇〇千円
払込　五〇〇千円
株数　四〇〇、〇〇〇株
出資状況　日本側　一〇〇〇千円（二万株）
中国側　一〇〇〇千円（二万株）
役員　董事長　殷叔祥

副董事長　斉藤英一郎
常務董事　何子京（外一名）
董事　何一之（外五名）
監事　安部信治（外一名）

工場別労働者数
昭和十二年　三五〇名
昭和十三年　七二〇名

営業成績
中国人

資産

	昭和十二年	昭和十三年
固定資産	一九、〇〇三円	三四三、五八七円
長期貸付金	二〇、〇〇〇	二一、五〇〇
仕掛品	—	一、五〇七
流動資産	五二三、四八〇	一五、五九四
雑資産	七五、三八四	二六八、五九七

前期繰越損失金	七〇、八二二	一三四、七四七	
当期損失金	七〇八、六九一	七、七九八	
計		七八五、五三四	

損益構成

	昭和十二年	昭和十三年
總收入金	二二、四五五円	一九四、一八八円
總支出金	九三、二五八	六〇、二三八
当期純損益	七〇、八〇二	一三三、九四九

業務現況

昭和十二年七月通州事件に遭遇、爾後鉱区方面の調査に着手し、昭和十三年一月より坑道掘進作業準備開始、六月初旬に至り運搬軌道の布設、運搬道路の開設、社内専用の電話路線架設作業を完了。同月共産匪の跳梁あり、電話線、枕木、建物、諸施設根本的に掠奪せられ、被害額六万円なり、その後鋭意復旧に努力し、昭和十四年一月より坑道掘進作業を開始し現在に至って居る。

次に許可鉱区及買收鉱区を表示すれば次の如し。

(1) 許可鉱区

鉱区名	位置	面積	備考
三道溝	遵北県懋進河莊遵北二道坑、三道坑、小石家口一帯地方	三三五、八二七、八平	名儀人冀東公司
岡山口	遵北県西北二十公里岡山口北方家莊新格莊一帯地方	二三三、七六二坪一	
塔峪	遵北県西北二十三公里大安口塔峪村南北山一帯地方	六八、一〇八坪四	
桃園北溝	遵北県西北二十公里茅山廟迎東運花辨山禪林院	七三九、五五六坪四	

(2) 買收鉱区

鉱区名	位置	面積	備考
袁果莊	遵化県遠泉莊東北候家溝前子峪迄南附近	一三六、九九四坪、八	
小老虎山	遵化県石家莊西南安新峪老虎山火石溝等	五、七七〇坪、〇	
大老虎山	遵化県西北三十二公里安新峪南老虎山三道溝趙家溝北山一帯	五三、八七〇坪、〇	

尚當社は三菱鉱業へ賣鉱して居るが当社の精練所建設計畫は、第一期、第二期に分ち第一期は採鉱期間（一ヶ年）とし此の期間の成績に依り第二期計畫を樹立するものなり、

十四、楊家地煤鉱公司

所在地　河北省冀平県門頭溝楊家地村

設立年月日　大正六年

資本金　一、五〇〇、〇〇〇元（四分の一払込）

企業形態　日支合弁
　日本側　中日鉱業株式会社
　支邦側　陳全福

鉱区面積　五六五畝

設備
　汽罐　七（合計二二〇馬力）
　捲揚機　一　　竪炭窯　一五
　喞筒　一〇　　斜抗　二
　修理廠　一　　抗内軌道敷設等
　篩炭機　四

運搬
　其他採炭は支柱式
　鉱廠　軍莊三支里汽車運炭
　軍莊　三家店に手押運炭龍烟鉄鉱公司引込鉄道を経て平門引込鉄道に通ず。

出炭高　一九二八年　四一、三六〇噸
　　一九二九年　二〇、六八三噸

備考　本鉱は炭質不良、出水多く、経営不振に付一九三一年以来休鉱し現在に至る。

十五、日支炭鉱洗選株式会社

法人格　日本法人
設立年月日　大正六年十月
本店所在地　東京市麹町区九〇の内二ノ二
鉱業所　中華民国河北省臨榆縣石門寨
資本金　三、〇〇〇、〇〇〇円　全額拂込済
　　株数　五〇、〇〇〇株
出資状況　白石、高久、田中、大川、福本、が大株主　白石系の会社

役員　社長　白石元治郎
　　専務　高久馨
　　取締役　田中栄八郎　他二名
　　監査役　高久敏男　他一名

石門寨の紛争者　支那人苦力約一、五〇〇人
（本会社は採炭能力、輸出能力等の照会をなせしも本稿締切迄に北支鉱業所に関する回答に接せず、これも省略す。

十六、長城煤鉱鉄道股份有限公司

法人格　日支合弁
設立年月日　民国二十六年
本社所在地　中華民国天津
鉱業所　河北省臨榆縣
資本金　一、五〇〇、〇〇〇元
出資状況　東拓側　七五〇、〇〇〇元

出炭及事業状況
（本報告執筆期迄に報告に接せず）

十七、南定炭鉱株式会社

法人格　日本法人
設立年月日　大正十一年
本店所在地　東京市京橋区銀座　大倉別館
鉱業所　南定華塘炭鉱
資本金　一、七〇〇、〇〇〇円
出炭及事業状況　（報告に接せず）

第五章　軍管理工場

今次事変に依り皇軍の占拠せる北支地域内に於ける石炭及製鉄等は軍に於て管理し之が臨時運営を興中公司に依嘱した。興中公司は右諸事業の運営を受託し接収設備の復旧並拡張、事業の整備に努めると共に、内地諸鉱業会社と協力し夫々関係会社の設立準備を進めつゝ、日支官民の要望に対処してゐる。

以下興中公司受託運営事業に付概説しよう。

一、炭鉱関係

炭鉱受託運営は昭和十二年十二月六日井陘炭鉱を手始めとして順次受命、其の復興に着手すると共に直ちに採掘に着手した。受託運営炭鉱の概況を表示すれば次の如し。（単位千瓲年産）

（註、支研経済旬報に依る）

(一)井陘炭砿位置

炭砿名	所在地	埋蔵量	出炭能力	現出炭量	炭質
井陘	河北、正太沿線	二四、七五〇	四〇〇	四〇〇	高度瀝青炭
正豊	同　前	六、六〇〇	二八七	二七二	良粘結炭無煙炭
六河溝	河北、京漢沿線	四〇〇	一五一	二〇〇	有煙炭
陽泉	山西、正太沿線	七四、六五〇	一三〇	二七	無煙炭
寿陽	同　前	六、六五〇	一三〇	三〇	半無煙炭
中興	山東東莊附近	一〇、三五〇	六五〇	六五〇	粘結性炭
華豊	同　大洛附近	二五、五六〇	一七五	一五〇	有煙強粘結性
華宝	同　前	二八、〇〇〇	一七五	一五〇	粘結性炭
西山	山西、大原西部	二二、七一〇	一八二	一六五	上部有煙炭下部無煙炭
焦作	河南、道清沿線	三七〇、〇〇〇	不確定	不確定	河南最良無煙炭

河北省井陘県東北の崗頭村に在り、南正太線の南河頭駅を距る二十華里の地点なり。

沿革

清朝光緒二十四年井陘県人張鳳起なるもの一八畝を砿区として開砿せるも久しからずして作業を停止せり。張鳳起は独人漢納根と深砿契約を結ひ漢納根は資本銀五万両を張鳳起は砿区一八畝の現物を出資し井陘煤務局となす。光緒三二年張鳳起所有砿区を政府が買収し光緒三四年支那側井陘砿務総局と独側井陘砿務公司を合併し資本金五十万両とし直隷井陘砿務局と改称す。

民国六年支那政府対独宣戦に依り従前の契約は凡て廃止さるゝと共に独人は帰還せり。業務亦全て政府に於て掌握するに至りたれど損失債权の整理に苦しみたり。

欧洲大戦終末後独支協約に根據し支那政府と独人砿務公司代表漢納根及包爾と改めて新定款を定めたり。

之に依れば井陘炭鉱は直隷省有なる事を明記し井陘公司は原有せし株式及財産一半を直隷省に譲渡せり、公司は其の原有したる株式の内銀一二五、〇〇〇兩を残留す即全株式銀五〇万兩の四分の一なり本契約は二十年を以て期限とし期限満つれば本鉱の財産は全て省政府の所有に帰すべきものとせり。

以後業務大いに振ひ民国二十五年には再び井陘鉱務局と改称され著制の回復を見たり。

興中公司の鉱務局独側持分の買収

井陘炭鉱の経営に日本の資本技術を導入し其経営の合理化を計り、安價なる石炭を平津市場に供給すると共に製鉄用コークス原料炭を日本に供給し、以て日支の密接なる経済関係の確立に資する為め興中公司に於ては事変前より独側持分の買収を画策し来りしが、昭和十二年十月十一日之が買収交渉成立し一三五万元にて同局の株式の四分の一及其に附帯する独側一切の権利を継承したり。

資本関係

井陘鉱務局

河北省政府	3/4	三七五、〇〇〇
興中公司	1/4	一二五、〇〇〇
計		五〇〇、〇〇〇 元

鉱区

本鉱区は海拔約三百米東西約五粁南北約七粁南北約七粁を占むる井陘盆地の中央部より北方に偏して存在し東は中正、北正、秋樹坡及南寨の各村を結ぶ線、西は西王舎村及西尚頭村を結ぶ線、北は西王舎村及北寨村を結ぶ線、南は西村及横涧鎮北端を結ぶ線に囲まれたる東西約三粁、南北約四〇三粁の区域にして鉱区内に於ては一般に地表は西方より東方へ緩傾斜を示して居る。

炭質

強粘結性を有する高度瀝青炭にして成分及発熱量は左記の通りなり。

炭種	固定炭素	揮発分	灰分	水分	計	硫黄	発熱量
切込炭	六三、一〇%	二五、五八%	一〇、九六%	〇、三六%	一〇〇%	〇、八六%	七、五九二カロリー
塊炭	六一、七六	二八、五六	九、〇九	〇、五九	〃	一、一六	八、一七二
粉炭	五八、八九	二六、三四	一四、三三	〇、四四	〃	〇、六三	七、四九五
二号塊	六三、六九	二四、八九	一一、〇三	〇、四〇	〃	一、三八	七、七九四
三号塊	五九、三八	二七、二二	三、〇八	〇、三二	〃	一、三一	七、五七〇
洗粉炭	六三、九五	二七、二四	八、五九	〇、二二	〃	一、〇〇	八、〇一九
洗微粉	五九、六二	二六、三三	一三、五九	〇、四六	〃	一、〇六	七、三二一

用途　粘結性を有する故に骸炭製造に適す。発熱量大にしてクリンカーなき為め坑罐用に適し、火附易く且つ火持良好なるを以て家庭用炭にも適す。

現在の職制及人員配置

現在假営業に於ける日本人配備は弦長以下一三名。

弦長　一　採炭　四（工人は三五〇〇名なり）

電機　二　懇務　二

医務　一　警備　三

財産

区	
固定財産	五、二四二、三六〇円
流動財産	一、一八七、〇〇〇円
合計	三八九、七二九円
	六、八一八、九八九円

但し財産評価に当り円と元とは同値とし又昭和十二年十月接収当時の財産とす。

将来の出炭計画

昭和十三年度以降左記増産計画に依り出炭す。

昭和十三年度	四〇〇、〇〇〇瓲
〃　十四年度	一、〇〇〇、〇〇〇瓲
〃　十五年度	一、〇〇〇、〇〇〇瓲

昭和十六年度　一、〇〇〇、〇〇〇瓲

即ち井陘炭鉱区域に於ては一、〇〇〇、〇〇〇瓲を限度とし其操業年数(三)

乙年を維持し井陘正豊両炭鉱の寿命終了し稼行を廃止せる後は増加出

炭量三、〇〇〇、〇〇〇瓲は水南発区域より出炭するものとす。

(二)

正豊炭鉱

位置、正太鉄路沿線井陘県城の東北約十五支里鳳山村に在り。

沿革、光緒末年正定人、正聘卿氏の創業にかゝる後殷啓勲氏總辨となり鉱区を拡張し民国九年独人技師「クリツカー」氏を聘し竪坑を開鑿し正太鉄路より引込線を敷設し規模漸く整ふに至る処民国十六、十七年には水乱の為め十八年には罷工の為め其後は経済界不況の為め成績振はざりしも民国二十三年以降活況を呈するに至れり但し従前負債缺損を償還するに至らずして今次事変に会せり。

現在総組は殷宏業にして、目下天津に在り資本金六百六十万元の中国商辨なり。

鉱区

井陘県北鄉鋪南塞一帯、西王舎、新尚頭、白彫村、蒲蘭等の各所に鉱区を有するも鳳山、白彫区以外は既に採掘し盡したる物又は炭厚の貧弱にして重要ならず現在稼行区の鳳山、白彫区を以て本公司の全鉱区と見做して可なり此の鉱区面積約五二一万平方米なり。

炭質

大部分良粘結性にして分析表を次に掲ぐ

層別	水分	揮発分	固定炭素	灰分	骸炭性	発熱量
第一層	〇、七六	二三、三四	七〇、五〇	五、四〇	膨脹粘結	八、二三一
第二〃	〇、一二	二二、五八	七〇、三〇	八、〇〇	膨脹粘結	八、〇七七
第三〃	〇、七〇	二四、五〇	六七、〇〇	七、八〇	粘結性	七、六一〇
第四〃	〇、六八	一八、三五	七七、〇四	三、九〇	同右	八、一一三
第五〃	〇、六一	一六、六四	七二、一二	一〇、六〇	同右	七、五四一

財産

正豊炭砿固定資産評價（推定）

品目	数量	単位	評價額
砿区			三、〇〇七、四五〇〇〇
坑道			一四一、〇〇〇〇〇
土地	五二〇、〇〇三 平方米		五二、〇〇〇〇〇
建造物	一九、二三七・五 平方米		二二五、〇七三〇〇
機械設備			三二九、七三〇〇〇
鉄道			四二〇、〇〇〇〇〇
在庫品	七粁	六〇、〇〇〇〇〇	五〇、〇〇〇〇〇
合計			三、二二五、二五三〇〇

将来の出炭計畫

昭和十三年度　一〇〇、〇〇〇瓲

昭和十四年度、　三〇〇、〇〇〇瓲

〃　十五年度　三〇〇、〇〇〇瓲

〃　十六年度以降

即ち正豊炭砿区域に於ては四〇〇、〇〇〇瓲を限度とし右区域の採業年数（四六年）を保持し井陘正豊両炭砿の壽命終り稼行を廃止せる後は新開発区域より出炭するものとす。

(三)陽泉炭砿（保晋公司）

位置

陽泉炭砿（平定保晋分公司）は保晋公司の経営せる所謂保晋炭砿にして、正太線陽泉駅に事務所を有し、炭砿は陽泉駅と其の西方約七粁、次駅賽息との間及其北方に散在し計六砿廠を有す。

沿革

光緒二十四年（一八九八年）山西省商務局は英商と契約し、省民の平安盂県路安沢洲平陽等の地方に於ける石炭鉄の採掘を許可せず、且つ省民

炭区	水分	揮発分	固定炭素	灰分	硫黄	発熱量
筒子溝	〇、四六	七、二三	八五、八〇	五、六二	〇、九八	七二五四
蕊子溝	一、一四	八、四六	八六、八四	三、五六	〇、九八	七八二六
小南溝	一、一四	八、四六	八六、八四	三、五六	〇、九八	七八二六
賈地溝	〇、三四	八、三五	八五、八〇	四、六二	〇、八九	七九五七
先生溝	二、七八	一〇、九五	八一、六八	四、五九	〇、八四	八〇五五
平潰溝	二、二〇	九、四〇	八〇、〇〇	八、四〇	一、九六	八〇一一
漢河溝	二、八七	一〇、八六	八一、七二	四、五五	〇、八八	八〇四五

現在の職制及人員異動（主要職員）

事変前　職員数　三〇五名

職工数　三、六〇〇名

事変後　日人職員　一四名

中人職員　八六名

同職工　六九八名

財産

項目	
土地	五〇、七八〇
家屋	二六二、八二〇
坑口	四〇六、六〇一
機器	八八八、九九四
家具	三〇、四二八
貯蔵機械及材料	一、六二四
総計	一、六八一、二四九

の從來より経営せる小鉱は全て閉鎖すべき旨照会を発したるも、其後利权回收熱の波に乗じた省民の猛烈なる反対に遭ひ遂に彼等の手に依り鉱業权の回收が行はれ光緒三十二年（一九〇六）採晋公司が成立し、同三十四年（一九〇八）資金を募集し事業を開始するに至った。

公司創業当時は耕地税五万兩を以て資本とし次年耕地税十五万兩を以て設備を完了し、光緒三十四年公司は巡撫の命に依り株式三百万兩を募集し山西省の大株三万兩、中株一万五千兩、小株一万二千兩を負担せしめ、計銀百六十万余兩此の外政府が五万兩山西省以外の各省に於て一八万兩総計一九二万兩を募集し得たり。其後耕地税の收入悪く保晋公司は英商福公司に百十七万兩を株にて返済し民国十一年に福公司の株を全部買收せり。

近年保晋公司の損失大にして事業は停滞し営業不振株の利息も亦積重なりて百余万元の額となり株價暴落せり。

鉱区

埋蔵量　本公司鉱区は大小合計七個所あり其名称埋蔵量、面積を示すと次の如し。

鉱区名	埋蔵量	面積	登録年月
簡子溝	一四、四六八、八七四	六・五〇六 方里	民国八年八月
慈子溝	三五、六九九、五七二	八・〇九六	〃 七年八月
小南溝		八・五一八	〃 七年八月
賈地溝	一六、九五二、二〇七	一二・五三八	〃 九年五月
先生溝	六、一九四、八九〇	四・〇〇九	〃 七年五月
平潭溝	三六四、五三〇	二・〇二五	〃 七年五月
漢河溝	九六七、九八〇	一・二八七	〃 七年五月
合計	七四、六四八、〇五四	四一・一九七六	

炭質

各鉱区の産出石炭分析表を示せば次の如くである。

炭区	水分	揮発分	固定炭素	灰分	硫黄	発熱量
筒子溝	〇、四六	七、二三	八五、八〇	五、六二	〇、九八	七二五四
蒸子溝	一、一四	八、四六	八六、八四	三、五六	〇、九八	七八二六
小南溝	一、一四	八、四六	八六、八四	三、五六	〇、九八	七八二六
貿地溝	〇、三四	八、三五	八五、八〇	四、六二	〇、八九	七九五七
先生溝	二、七八	一〇、九五	八一、六八	四、五九	〇、八四	八〇五五
平潰溝	二、二〇	九、四〇	八〇、〇〇	八、四〇	一、九六	八〇一一
漢河溝	二、八七	一〇、八六	八一、七二	四、五五	〇、八八	八〇四五

現在の職制及人員配置（主要職員）

事変前

職員数　三〇五名

職工数　三、六〇〇名

事変後

日人職員　一四名

中人職員　八六名

同職工　六九八名

財産

項目	
土地	五〇、七八〇
家屋	二六二、八二〇
坑口	四〇六、六〇一
機器	八八八、九九四
家具	三〇、四二八
貯蔵機械及材料	一、六二四
総計	一、六八一、二四九

但し民国廿四年陽泉保晋公司財産目録とす。鉱区の表ハはとを計上せず。

将来の出炭計畫

出炭計畫に関しては平定炭田として壽陽炭鉱区域をも包含し石炭供給計画表に準據せり。

年次	予定出炭	対前年度増加分
昭和十三年度	二七、〇〇〇瓲	
〃 十四年度	六〇〇、〇〇〇瓲	二〇〇、〇〇〇瓲
〃 十五年度	一、〇〇〇、〇〇〇瓲	四〇〇、〇〇〇瓲
〃 十六年度	一、二〇〇、〇〇〇瓲	二〇〇、〇〇〇瓲

右の如く逐年増産を為し昭和二十五年度以降は八五〇〇、〇〇〇瓲の出炭を維持するものとす。

(四) 壽陽炭鉱

位置及交通

壽陽炭（石門子炭鉱）は山西省壽陽県下に在り。正太沿線壽陽駅より北方十七粁の地点に位し陳家河の流域に沿ひて交通可能なれど雨期に際しては通行杜絶する事あり。

沿革　宣統元年保晋公司が承専公司より三五、一五〇両を以て之を買収したるも、坑内水溢大にして経営困難に陥り、作業を停止し民国四年陳家河の土窯を修理して採炭を開始せり。民国八年更に旧斜坑を開鑿し今日に至る。

鉱区　鉱区面積は四方里三〇一、十九方丈六〇方尺にして推定埋蔵量は六六五瓲にして可採炭量三〇〇万瓲なり。

炭質　半無煙炭にして分析結果次の如し。

水分	炭分	揮発分	固定炭素	硫黄	発熱量
一、五	四、九五	一三、六五	八〇、九〇	〇、六五	八一五四

現在の職制及人員配置

職制不詳

人員配置左の如し。

	庶務	坑内	機械	坑外
日本人	四名	一名	一名	
支那人	二二名	約一五〇名		約一〇〇名

損益（十四年三月――十四年三月）

收入之部

販賣收入	一一八、〇〇〇（塊三、二〇切込三、四〇粉一、四〇）
貯炭	一八、九〇〇（六、三〇〇瓲瓲三、〇〇）
計	一三九、九〇〇

支出之部

總務費	一八、〇〇〇（月一、五〇〇）
採炭費	四三、〇〇〇（月三、五〇〇）
稅金	三、〇〇〇（瓲 六錢）

營業費	一九、二〇〇（月一、六〇〇）
福祉費	三、六〇〇（月 三〇〇）
本期利益金	五四、一〇〇（註）二（但し本貯炭一八、九〇〇円を含む）
合計	一三九、九〇〇

（五）六河溝炭礦

位置

炭礦は河南省、安陽縣槐名村に在り、河北、河南の省境に位す。

沿革

本礦は光緒二十九年（一九〇三）に土法を以て開始し從來數十年間引続き圧迫其他により營業屢々停頓し成績擧らず缺損を續く。

資本

光緒二十九年	二〇、〇〇〇両
〃 三十三年	三四、〇〇〇両
民国 元年	一、四〇〇、〇〇〇元

（次いで二、七〇〇、〇〇〇元中比合弗創設）
〃　十　年　三、〇〇〇、〇〇〇元
（公司改組中比合辨解除）
〃　二十二年　四、七五〇、〇〇〇元に増資未払込一、〇〇〇、〇〇〇元別に鉱損債務約六五〇余万元あり。

砿区

漳河を挟み河北河南両省に跨りたる二砿区あり。

觀台鎮砿区	一一七、八二三公畝
台家砿区	七、一二七公畝

炭質

炭質は粘結性有煙炭にしてコークス原料に適し、博山、中興炭と共に夙に定評あり石炭分析表次の如し。

水分	固定炭素	揮発分	灰分	熱量
〇、五〇	七二、二	一九、一六	八、四〇	七、九七七

三〇内

現在の職制及人員配置

昭和十三年五月五日現在の日人管理員配置左の如し。

採炭	五	電気	一
経理	一	倉庫	一
機械	一	測量	一
労務	一		

財産

砿区	二〇〇〇、〇〇〇円
用地	五〇、〇〇〇円
坑道	七〇、〇〇〇円
機器	二三〇、〇〇〇円
車輌	一一〇、〇〇〇円
建造物	三四〇、〇〇〇円
合計	三、八〇〇、〇〇〇円

(六) 中興炭鉱

位置及交通

山東省嶧県城北十二粁の棗莊にあり西津浦線の臨城より三十二粁にて之の間臨棗支線がある。又棗莊より台兒莊迄自家用鉄路五十二粁、台兒莊より瀧海線趙家墩に至る鉄道支線あり交通便利にして主なる仕向地は連雲港及浦口である。

沿革

本炭田は数百年前より土法を以て露頭部分は開発せられてゐた。

光緒六年　李鴻章中興区設立

〃　三十年　水災に会し且資金不足の為め閉鎖す。

〃　三十五年　外債に依り開坑したるも間もなく閉鎖。

宣統元年　三一七方里の鉱区設定す。

〃　二年　台棗鉄路を築き運車運煤を為す。第一期拡張計畫として新株百五十万両を募集し舊株八十万両と合し二百三十万両とす。

〃　三年　第二期拡張計畫として再び新株七十万両を募集し合計三百

万両とす。

民国　十年　資本金一千万元とし払込七百五十万元とす。

〃　十三年　北大井竪坑完成。

〃　十六年　戦禍に依り出炭中止の止むなきに至る。

〃　十八年　時局一段落と共に上海の銀行より五百万元を借款最高幹部を改め採掘方法の技師として独人を用ひ鋭意出炭に努む。

〃　二十三年　台兒莊より瀧海線趙墩支線新設工事に掛り翌年十月完成す。

以上の如く土法時代より水災戦禍の為め種々障害ありたるも近時営業回復し年産百二十万噸の出炭を見るに至り北支に於ける用滦鉱務総局に次ぎ第二の炭鉱である。

民国二十五年　出炭年産百七十万噸

〃　二十六年　事変に遭遇したるにも係らず出炭百六十六万噸を産出

鉱区

本炭田の鉱区は棗莊区域及斉村以西区域に大別し得、棗莊区域の露頭

附近は土法に依り採掘せられ、比較的最近にも中興公司直營の小竪坑を以て盛に採掘せられ、又淡新部には三角湧に依り機械的に開発せられ居り残存炭量如何の問題なり。

炭質

有煙炭強粘結性にして「コークス」製造に適す。分析表次の如し。

	水分	揮発分	固定炭素	灰	硫黄	粘度
大槽	〇、六四八	二七、一八六	六三、二一五	九、九五三	〇、六二二	七、八五三
小槽	〇、四二一	二八、三三一	六四、二九九	七、〇五〇	一、四五六	六、九三〇

現在の職制及人員配置

日本人　炭礦長　一　　鉱務長　一
庶務長　一　　事務員　三
技術員　五　　医員　一
計　十二名

中國人　抗内外職員　一七七　　工人　九六五
警備　三三七　　包工人　一五〇〇
計　二、九七九名

財産

詳細なる現在の財産調査未了に就ては民國二十二年度貸借表を以て参考とせん。

資産		負債	
礦山價格	四、二一六、七九二元	資本金	七、五〇〇、〇〇〇元
白藥鉄路價格	九二三、七六二	公司債	五〇〇、〇〇〇
銀行往來	一五六、四七一	買約借款	二〇〇、〇〇〇
商号〃	一、二五六、三一〇	保証押款	一四九、〇〇〇
貯炭・價格	一、五三三、四七一	存款	七一二、四六二
貯藏諸材料價格	七二四、九〇三	各項往來	二五六、二三八
津浦是期債款(三)	一、三四八、〇〇〇	總分往來	六、〇八九

有價証券	三一、一〇一
特殊塑款	一、〇〇〇、〇〇〇
現金	三五八、五九三
合計	一一、四六八、三五二

備抵呆帳	三四四、六八八
上期繰越金	二一、七九五
本期純利益金	一、三七八、〇八六
合計	一一、四六八、三五二

將來の出炭計畫

年次	棗莊区域出炭	斉村以西区域出炭	出炭計
昭和十三年度	六五〇、〇〇〇	—	六五〇、〇〇〇
〃 十四 〃	一、五〇〇、〇〇〇	—	一、五〇〇、〇〇〇
〃 十五 〃	一、八〇〇、〇〇〇	九〇〇、〇〇〇	二、七〇〇、〇〇〇
〃 十六 〃	二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇
〃 十七 〃	二、〇〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇	三、五〇〇、〇〇〇
〃 十八 〃	二、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇

(七) 華豊炭砿

三十二外

位置

山東省甯陽縣東磁窰村にあり県城の東北約四十粁、津浦鉄路大汶口駅の東南十粁、斉窰駅の東五粁、南駅の東北六粁。

沿革

土法時代　宣統元年米獻臣、魯山、李幼桓等資本金三万元を以て公司を起し東磁窰附近にて採掘を開始す。民国六年迄に二十数万元の利益を擧げたるも其後相続く土匪内戰等の影響を受け民国二十年には経営困難となれり。

華豊合記公司時代　民国二十年七月組織を改め、旧施設を二十四万元と評価し、新に五万元を加へ華豊合記公司を設立し、高鶴徐を経理に推し、鋭意経営の改善を計り、約六万元を以て運炭路を敷設し成績一時擧りたるも其後資金潤沢ならざる為め、前借先引き販賣等を為したるに依り利益少く株主間の紛争を惹起するに至れり、二十四年度以降は年度決算も為さざる状態なりし所今次の事変に遭ひ経済

納に全く行詰るに至れるものなり。

鉱区面積　三、六四七、七〇四平方米

炭　質　有煙強粘性にして各層別分析表次の如し。

層名	水分	揮発分	固定炭素	灰分	硫黄	発熱量
第四層	二、四四	三二、一二	四八、四三	一七、〇一	二、七九	六、五三〇
第五層	二、二〇	三〇、四五	五二、一四	一五、二一	一、五四	六、五六六
第七層	二、三二	三一、八七	五一、九六	一三、八五	一、三七	六、七一三

現在の人員配置

日人管理人　一〇名

中国従業員　職員　三五名　職工　一五七名

財　産

詳細なる現在の財産調査未了に付第三年度資産負債各合計を以て参考とする華豊合弗煤鉱公司資産負債各合計（民国二三年六月廿日）

資産合計　五五三、六三五

負債合計　五五三、六三五

将来の出炭計画

但し本計畫は華豊、華室両炭鉱合同出炭量とす。

昭和十三年度　一五〇、〇〇〇

昭和十四年度　二〇〇、〇〇〇

〃　十五年度　八〇〇、〇〇〇

(八)華室炭鉱

位　置

華室公司事務所は山東省泰安県南村にあり炭田の中心なり（南村炭田と称す）

沿　革

沈南村の炭田は以前土人の委ねられてゐたが、宣統帝復辟を策し失敗して野に下りたる張勲は彼の軍需官たりし劉錫慶と合同し両人各一〇

万元を出資し、之に地元資本家の資本約十五万元を加へ、当鉱区の開発を志し、民国六年三月農商部より禹村鉱区の領有並に採鉱許可を得て、商弁華宝煤鉱股份有限公司と称し、鄭俊声を総理に任じ経営に着手せり、同年中開掘したるは計一及計二坑なり。

民国八年経理を李仲权に代ふ。

民国十年十月西溝洞に鉱区拡張を図り農商部の採鉱許可を得たり、民国十一年五月張、劉両人は各五万元の資本を増加し劉錫慶を総計理に王秀岩を経理に任じたり。其後更に経理を陳之序に代へたるも営業振はず、機械及材料の缺乏を来し第三、計四の開掘を試みたるも出炭思しからず、其後再び天津人李震伯を新に総理に任じたり。

民国十五年第五坑の開掘を為す。

民国十八年九月省政府は当鉱資産中に軍閥なる張勲の投資あるを理由として之を没収して官営となし、山東省直轄禹村煤鉱局と命名し、俞物恒、胡傑相の二名を夫々局長及副局長に任命したるも経営思はしからず、民国十九年中に計六、七、八、九の四坑を開鑿したるも出炭多

からず而五ヶ年間に約一、〇〇〇円の缺損を生じたり、一方劉、張以下各株主は営業に反対し、返還方に付中央に交渉を続け居たる処、十九年十二月に至り始めて内政、農商の両部の合同決議に基き劉錫慶に対し返還の旨下命ありたるを以て再び商辦となり劉錫慶総理の席に着きたり。

民国二十三年株主会議を招集し其の決議に基き当鉱の拡大充実を図るため張、劉二人は更に五万元を投資し、従来の投資額と合せ各二〇万元を特株となし、其他の小株主も亦若干の増資を為したり。

同年十二月役員の改選を行ひ張勲の妻、張少徴を総董に任じ、劉錫慶を常董となし、総理を常勉斉、張閔卿を協理、張玉良を経理に委任せり。

民国二十五年公司組織に関する省令制定せられ資本額を登録することとなり翌二十六年一月株主姓名並に資本額を報告せり。当時の見積資産は六三五、二〇〇元なり、当時役員選挙に関し株主間に意見の衝突を見遂に訴訟に及びたるため省政府は之が整理に名を藉り接収し、名を

山東省政府華室煤砿整理処と改め建設廳技正俞物恒を主任に、技士史恩鴻を副主任に任命せり、三次事変に当り日本軍山東進出を見るや同年十二月二十六日前記省政府派遣員は逃亡し劉錫慶は直ちにこれを接收したり。

砿区

岛村炭田の總砿区面積は一一三、三二五、二四六公畝にして内華室公司砿区面積は次の如し

泰安沈岛村　三〇、三一八、四〇九公畝
泰安沈大泗溝洞　二二、九六四、七九九〃
合計　五三、二八三、二〇六〃

炭質

有煙炭にして骸炭製造に適す、其の分析表は左の如し。（在京地質調査所）

分析号数	水分	揮発分	固定炭素	灰分	発熱量	焦性	符号
一	一、四四	二七、八九	六二、二七	八、四〇	七、八〇八	固結	Bm3
二	一、六四	三六、九七	五六、九六	四、四〇	八、七八五	〃	B/2
三	三、〇八	三三、八〇	五四、九一	九、二〇	七、六五二	甚好	B/3
四	一、九八	三五、八〇	五六、四二	六、六〇	七、八八八	固結	B/2
五	三、四九	三三、三〇	五九、三五	四、八五	七、九六八	〃	B/2

現在の職制及人員配置

現接收管理委員　計七名

財産　不詳

（九）西山炭砿

位置及交通

大原西方一四粁、西山山麓白家莊部落に在り、運輸機関は太原小北門外より白家莊に至る太白鉄路の便あり、延長一九粁、別に王門溝より

洋灰廠に至る三八粁の支線を有し、総延長二三粁あり。元来日鋼鉄道支線なりしも、西北実業公司の事業に関係深き為め民国二十三年九月同公司に移転せるものにして、専ら白家莊煤鉱第一廠の石炭、洋灰廠のセメント及西山産出の耐火粘土等の運輸に当れり。

沿革

本炭鉱は西北実業公司煤鉱第一廠と称し、西北実業公司の経営即ち官営にして、民国二十年四月綏靖主任閻公の命に依り各処の炭質調査に着手し、二十一年太原陽曲の南県、西山、月門、虎峪、九院、沿峪等に於ける埋蔵量は頗る豊富旦採掘可能充分なるを確め、同年七月鉱区を定め、ボーリングを施行せるに、九院峪、白家莊、後寺溝等の炭質佳良にして地形も亦諸施設を為すに比較的容易なるを以て、経営を実施することゝし、三六万円を投資し竪坑掘鑿、事務所建設、軌條敷設、機械購入設置等、其他諸施設を為し、斯くして二十三年八月一日正式成立し、採掘準備を極力急ぎ二十四年一月坑内準備作業竣工し、日産約百噸内外を産出、太原附近一帯に販賣するに至れり。

其後第二坑の掘鑿に着手し、二十五年の末頃には完成せるもの、如し、事変前には日産約五百噸内外の出炭を行ひ、猶投資額に於ては当初より通算し約百万円と推定せられる。

鉱区面積

太原県城を距る、西北四十華里白家莊部落を中心とし、北は虎峪村、南は狼窩山及石盒子を以て界とし、東は南梁山、西は沙窪坑頂に至る、東狹西寛の楕円形を成す、総面積は二、七五二、五八六平方米を有す。

炭質

九尺層、十八尺層の分析表次の如し

炭層	水分	揮発分	灰分	固定炭素	硫黄	発熱量
九尺層	一、七四	一一、五五	五、〇四	八一、一四	〇、五三	六、六〇〇
十八尺層	〇、七〇	一四、二六	八、三〇	七六、六八	〇、六八	七、〇〇〇

財産

用地　八、〇〇〇坪　五、〇〇〇円

鉱区（埋蔵量）二二、七一〇、〇〇〇　二二七、一〇〇〃

坑道　一号竪坑　一〇、〇〇〇〃

二号竪坑　三〇、〇〇〇〃

機械　七、七〇〇〃

車輛　一五、〇〇〇〃

建物　二七、二〇〇〃

工作物　一二、五四〇〃

總計　三九、八、五四〇〃

山西省石炭埋藏量

山西省石炭埋藏量は一二七、一一五、〇〇〇、〇〇〇噸にして世界列國の埋藏量と比較すれば次の如し。（單位千噸）

米國	三、二二五、三九四、三〇〇
英國	一三五、二九二、五六三
山西省	一二七、一一五、〇〇〇

独國　五六、八八九、〇〇〇

佛國　四、五〇四、三二五

山西全省の石炭埋藏量は略英國に匹敵し、独、佛の數倍或は數十倍に達し、これが開発は我國石炭燃料問題の愁眉を開きたるものと謂ふも過言に非ざるべし。

(ロ)焦作炭鉱

位置

河南省修武縣焦作鎮を中心とせる清化炭田にあり。

福公司の沿革

福公司は山西炭田を開発せんとして光緒二三年（一八九七）に設立せられたるものなるが、平定縣外五縣の商民の反対に会ひ、已むを得ず河南省焦作附近の炭田を採掘する事となり、光緒三〇年（一九〇四）政府より正式に採掘权を得て、事業に着手せしも、経営思はしからず依りて民國十年焦作西方の李封及び王封し、十二年、十三年は成績頗る挙れり。然るに十四年に五三事変起り工人のストライキ発生し休業

するに至り英人は避難せり。
満洲事変以後英人はこれを援活せんとせしも、鉄道輸送等に付支那側の圧迫を受け成績振はざりし為め、英側より懇請して、民国二十二年六月支那資本の中原公司と合資し、中福聯合弁事処を設け経営することになりたり。従て現在福公司は中福聯合弁事処に対する投資会社にして且つ中福聯合弁事処に管理を委ねおる財産の所有者たる地位にあるのみなり。福公司の資本金は公称金一、五四〇、〇〇〇払込金一、二〇〇、〇〇〇なり。然共欠損の為め一九三七年、三分の一の減資を為し、現在は金八〇〇、〇〇〇なり。

中原公司の沿革

光緒三〇年福公司が焦作地方の採掘権を得たる後、即ち民国元年、中州、豫泰、明徳の三公司が民営工鑛を以て英資に対抗せんとして採掘を開始せり。然るに当時英資なりし道清鉄道が三公司の石炭運搬を阻止したるに依り、紛争を生じ、政府の仲介により、民国三年三公司を

合同して中原公司を設立せり。然るに中原公司と福公司との販賣競争甚だしかりし為め、民国四年資本金一〇〇万元の福中公司を設け採炭を別に販賣を合同するに至る。

中原公司は民国十一年より大規模に採炭を為し、成績頗る良好なりしも、民国十五年乃至十九年は軍閥の割據する為め経営困難なりしも北伐の完成全国の統一成り、営業は漸次好転せり。前述の福公司の休業時は中原公司の一人舞台となり、成績頗る振ふ。

民国二十二年六月福公司より聯合の申込を受け政府の仲介に依り中福聯合弁事処を組織し、現在は福公司と同様中福聯合弁事処に対する投資と原財産の保管とを保持するのみなり。資本金は中州、豫泰、明徳の三公司の旧区財産を一、〇〇〇、〇〇〇元の出資とし、河南省政府の官股一、〇〇〇、〇〇〇元、一般募集の商股一、五〇〇、〇〇〇元を合せて三、五〇〇、〇〇〇元なり。

中福聯合弁事処の沿革

現在焦作炭鑛を経営するものは中福聯合弁事処にして、支那資本の

中原公司と英国資本の福公司との合資経営するものなり。

前述の如く、民国四年に中原公司と福公司との間に福中公司なる販賣合同組織を用ひ店たりしが、民国九年石友三の頃より有名無実となり殊に五三事変の為英人が避難したる後は唯形式の存在となり居りたり、民国二十二年英側より支那政府を動かし、其斡旋に依り販賣のみならず、一切の財産を管理し、炭砿を経営する所の中福聯合弁事処を組織し現在に及べるものなり。

中福聯合弁事処は確定したる資本金なく、唯資本金三、五〇〇、〇〇〇元の中原公司の財産一切及び八、一七八、七〇〇元の福公司の財産を管理運用し、流動資本として中原公司五一〇、〇〇〇元福公司四九〇、〇〇〇元払込みたる組織体なり。

炭層

山に沿ひ山麓に露頭を表し、南方に八度乃至十二度にて傾斜す。炭層は石炭二疊紀に属す。

砿区

焦作鎮を中心とし東西約三粁、南北約三、五粁面積約七五平方粁なり。

炭質及用途

無煙炭にして煖房用として最適なり、殊に臭気なきを推賞さる。

財産　不詳

将来の出炭計畫

民国二十七年		二七〇、〇〇〇噸
〃　二十八年		六六〇、〇〇〇〃
〃　二十九年		一、〇〇〇、〇〇〇〃
〃　三十年		一、三二〇、〇〇〇〃
〃　三十一年		一、六五〇、〇〇〇〃
〃　三二―五一年	各	二、〇〇〇、〇〇〇〃
合計二十五ヶ年		五五、〇〇〇、〇〇〇〃

以上の外、軍の命令に依り興中公司が目下接收中の炭砿を挙げれば次の如し。

炭砿名	所在地

康山炭砿　山西省牛坨村
華興炭砿　〃　考義
晋興炭砿　〃　洪洞
平遥炭砿　〃　平遥
中和炭砿　河北省峰々村
永安炭砿　〃　梧桐莊
磁県砿務局　〃　磁県

二、鉄事業関係

(一)石景山製鉄所

所在地

河北省石景山（京平線西直門駅より十九粁京門支線石景山駅東南約一粁）

沿革

民国八年三月当時徐世昌総統の北京政府に依り成立した官商合弁資本

金五百万元龍烟公司の煉鉄廠として建設工事に着手せられた。初代督弁に陸宗輿を任じ北支随一の重工業の先駆を為したが、其後数次の兵禍に遭遇して、後原作霖の手中に帰し、一時修復建設が計畫されたが幾許もなく革命軍の北伐進軍に依て中止となった。

民国十七年国民政府成るや、蔣介石は龍烟公司を接収し、烟筒山鉄鉱区、将軍嶺石灰山と共に石景山鍊鉄廠を接収し、民国二十五年に至った。当時翼察政權との間に日支経済提携の議起るや其の重要懸案事項の一として該鍊鉄廠の修復建設が計畫せられ、興中公司と冀察政权との間に折衝が開始せられた。偶々今次事変の勃発するところとなり、軍保護管理の下に於て昭和十三年四月二十日興中公司此の受託経営を命ぜられ其の完成を見るに至ったものである。

既存設備

人、製鉄設備

貯鉱場	延長九八米	一ケ所
貯骸槽	延長二二米	一ケ所

捲揚設備			一式
熔鉱爐	日産二五〇瓲		一基
鑄床			一式
熱風爐		容量毎分七〇〇立方米	四基
送風機			二基
コークス燒窯		石炭裝入容量一〇〇瓲	五〇基

2、附帯設備

充罐	五〇〇馬力		五罐
発電機	直流二五〇キロワット		二基
構内鉄道			八粁
機関車	二一瓲		三台
貨車	四〇瓲		三八輛
沈澱池			二ケ所
貯水池			二ケ所
御箇室			三ケ所

軟水設備		一式
事務所		一棟
修理機械	將軍嶺	一式

尚第一貯水池の補修、沈澱池の新設及之に伴ふ給水配管工事等は帰順兵に依る工程隊の動員並に附近村民の自発的協力を得て、日支協力の範を示し完成す。

財産（受託当時のものにして興中評價に依る、以下同断）

土地	（二四四、〇〇〇坪）	四八、八〇〇円
製鉄設備及附帯設備		一、二一六、九三八〃
合計		一、二六五、七八三〃

事業概況

石景山製鉄所は北支経済建設の礎石として不取敢既存設備を活用して可及的短日月を以て作業を開始し、更に大局的見地より第一、第二次の計畫を以て昭和十六年度其の最高生産機能を発揮する可く、尚今後銑鋼一貫作業の向題と関聯し新計畫も用意しつゝあるが、当初は二五〇

瓲爐一基に依て日産一五〇瓲の銑鉄製造に着手する。
今これに要する原料を示せば次の如し。
（日産銑鉄一五〇瓲に対する一日使用量）

1、鉱石	龍煙鉱床	二八〇瓲
2、石灰石	將軍嶺	一五〇瓲
3、骸炭	石炭業組合骸炭工場	一八〇瓲
4、石炭	井陘、六河溝	二〇〇瓲
5、満俺鉱	南洋	五瓲

右の中主要原料たる原鉱石及石灰石は旧龍煙公司の財産として蒙疆政府の所管となつてゐる察哈省所在龍煙鉄鉱、及び軍の管理する河北省三家店所在の將軍嶺石灰山より供給を受け、骸炭及石炭は軍管理に於て興中公司運営中の井陘、六河溝炭鉱の供給を受け、火入式当日現在鉱石一万四千瓲、石炭六千瓲、石灰千三百瓲、満俺五〇瓲、の設備を有し、更に生産高に應じ逐次輸送の予定なるも、何れも原料資源の現地調査に依て極めて有利なる事業條件を具備してゐる。

従業員（昭和十四年九月末現在）

日本人	一六四名
中国人	一九五名
合計	三五九名

治安状態

石景山製鉄所附近一帯は地理的関係上防衛圏を組織し皇軍と密接なる連繋の下に警備の強化を図り更に附近村落を一丸として愛護会を組織し日支共存共榮の目的に向つて一層円満なる意志疎通機関として活動せしめ居るもの、如し。

（二）太原鉄廠

所在地　山西省太原城北古城村

沿革

本製鉄所は元西北実業公司煉鋼廠と称し西北実業公司の手に依り民国二十三年四月一日より工事開始事変当時約八〇%の工事を完成し居り

たり。

既存設備

熔鉱爐	一二〇瓩爐	一基
	四〇瓩爐	七基
熱風爐		一式
石附属設備		
平爐工場	各基一日一五〇瓩	二基
圧延工場	一大斜軌條 一日一二〇瓩	一式
発電設備	各基五、〇〇〇KW	二基
骸炭工場設備	日産 二四〇瓩	一式
副産物工場		一式

百二十瓩爐副産物工場は目下修補中、圧延工場平爐工場は接收当時の爐。

財産

土地	一一六、〇四二坪	四、八六二円
建物		七二八、五〇〇円
工場設備		三、八三六、〇〇〇〃
貯蔵品		三七七、〇〇〇〃
合計		四、九四六、三六二〃

事業概況

山西製鉄事業に重大なる役割を有する本製鉄所は被害最も多かりしも大倉鉱業株式会社の協力の下に鋭意修復四〇瓩熔鉱爐一基は昭和十四年十一月十八日火入式を挙行一二〇瓩熔鉱爐一基及び骸炭工場其他附属工場も夫々修復完成近き状態に在り。

従業員（昭和十四年九月末現在）

邦人職員数		八二名
中国人		七三七〃
露人		三〃
合計		八二二〃

三十七内

(三)陽泉鉄廠

所在地　山西省陽泉(正太線陽泉駅の河北岸)

沿革

本製鉄所は民国六年保晋公司の手に依りて設立せられ、同十一年作業開始せり、昭和十三年一月二十四日興中公司に運営を委嘱せられ大船鉱業の協力の下に之が運営に当りつゝあり。

既存設備

熔鉱炉	二十瓩炉	一式
発電設備	四〇KW、七五KW	二基
機械製作所		一式
窯業工場		一式

二〇瓩炉及附属設備は完成し昭和十四年六月十日火入式を挙行す。

事業概況

昭和十四年四月、五月には改良工事進捗し又附属諸設備も完了、二〇瓩熔鉱炉は同年六月十日火入式を挙行銑鉄の生産を開始し、其の後順

調なる操業を続け居れり。

財産

土地	二七、八七六坪	四、三五〇円
運搬物		九三、六一〇〇〇〇〇〇
機械		四二九、〇〇〇〇〇〇
貯蔵品		四〇九、二七〇〇〇〇
合計		九三五、二三〇〇〇〇

従業員

日本人	一八名
中国人職員	四一〇〇
工人	六〇三〇〇
合計	六六二〇〇

(四)太原鑄造廠

所在地　山西省太原

本工場は元西北実業公司育才煉鋼機器廠と称し、昭和十三年一月二十七日興中公司に運営を委嘱せられ、満洲工廠の協力を得て運営中なり。

事業概況

鋳物工場、鋳鋼工場、鍛工場、機械工場に於て夫々活潑なる操業を開始せるもの、如し。

財産

土地	九、八〇〇円
建物	一五三、三四五〃
附属設備	三、四〇〇〃
機械	七八、九七〇〃
材料	六、二五八〃
屑鉄	一〇、二〇〇〃
合計	二六一、九七三〃

従業員

邦人職員数	二四名
華人職工	三九二〃

合計	四一六名
苦力延人員	一、四四七〃

以上の外興中公司が復旧運営に当れる工場を挙げれば次の如し。

工場	所在地
将軍嶺石灰石鉱山	河北省宛平県軍荘将軍嶺
太原窯廠	山西省太原
東山鉄鉱廠	山西省陽曲、榆次、文壽陽の三県に跨る。
定襄鉄鉱廠	忻窰線蔣村の東南約九粁土嶺口及十八項附近
寧武鉄鉱廠	同蒲線北段太原より一八七、八粁

三、接収後の投資額

今接収後に於ける現在運営操業し居るもの、投資額を炭鉱関係事業に於ては各炭鉱別、鉄関係事業に於ては各工場別に計上すれば次の如し。

炭鉱関係事業（昭和十四年三月末現在）

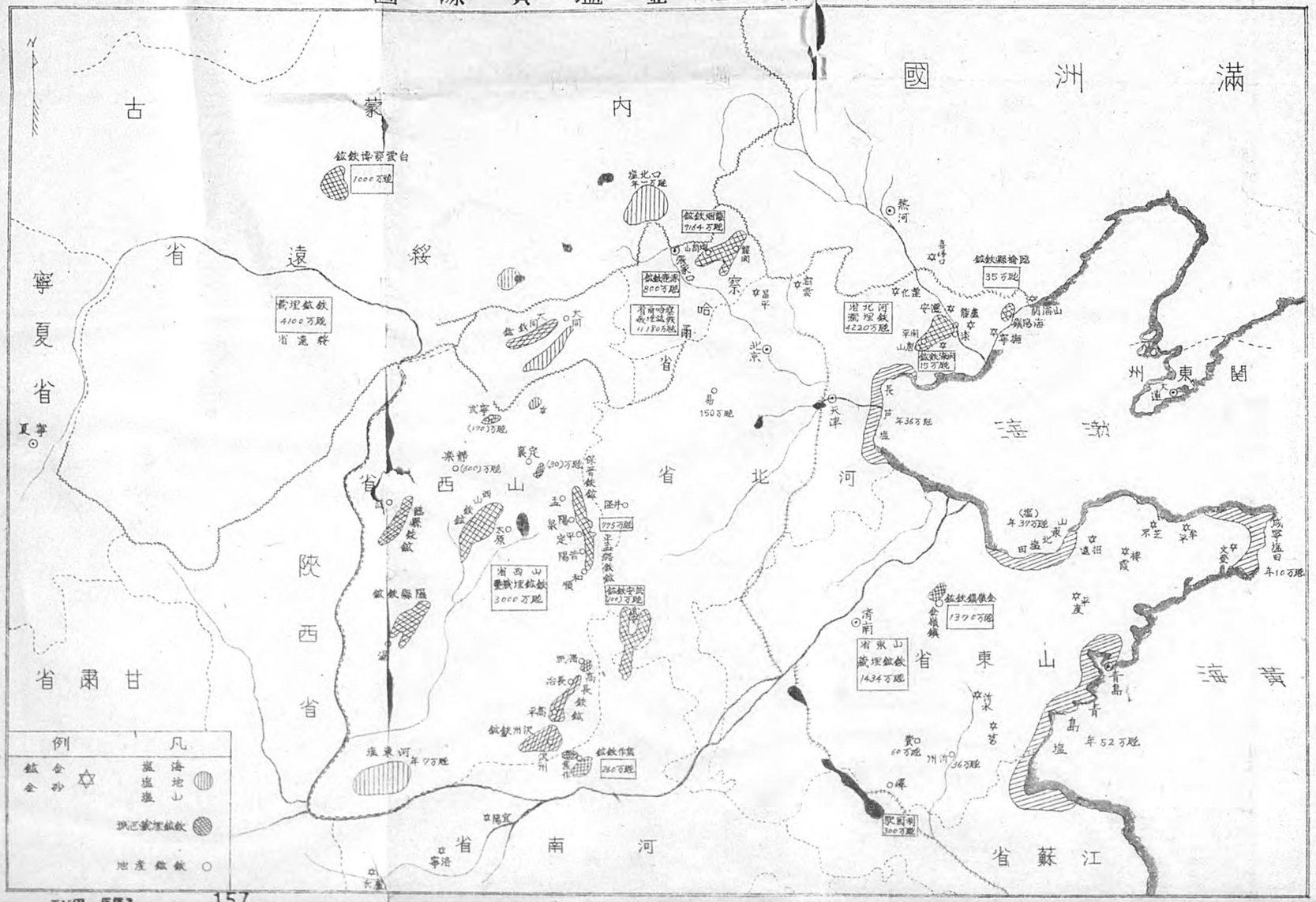
井陘炭鉱	七七三、一二八円

正豐炭礦　三五三、三二七円
陽泉炭礦　二五一、八四一円
壽陽炭礦　九二、三〇八円
大河莊炭礦　一七九、八三六円
中興炭礦　六八二、三〇四円
華豐炭礦　三一九、三〇三円
華宝炭礦　八二、三一四円
西山炭礦　一八六、八二七円
合　計　三、七〇五、一八八円

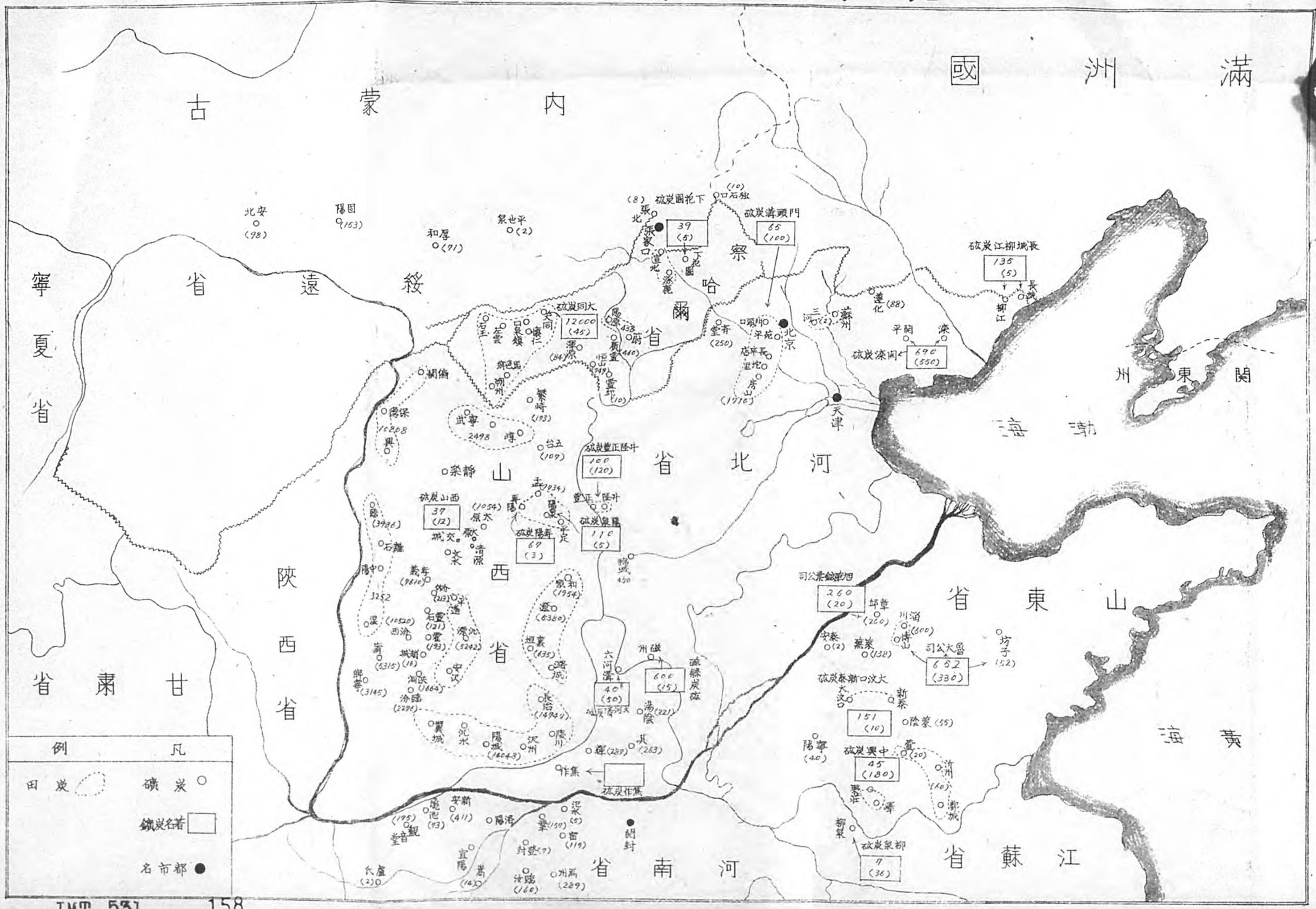
鉄鋼関係事業（昭和十四年八月末現在）

石景山製鉄所　五、三八五、〇七二円
陽泉鉄廠　三四四、〇八八円
太原鉄廠　七〇八、四四二円
太原鋳造廠　一六三、七〇一円
太原窯廠　一一二、四七九円
合　計　六、七一三、七八二円

北支鑛産並塩資源圖


滿洲國
蒙古
內
寧夏省
遠綏省
察哈爾省
北京
天津
河北省
陝西省
山西省
甘肅省
河南省
山東省
黃海
渤海
關東州
江蘇省
白雲鄂博鉱鉄
1000万瓩
鉱鉄烟臺
7164万瓩
鉱鉄南京
800万瓩
鉱鉄縣嶺
35万瓩
鉱鉄同
大同
鉱鉄滿洞
15万瓩
鉱鉄縣
鉱鉄縣
鉱鉄縣

北支石炭資源圖


滿洲國
蒙古內
綏遠省
寧夏省
甘肅省
陝西省
哈爾濱省
察哈爾省
河北省
山西省
山東省
河南省
蘇江省
東州關
黃海
渤海
北安
陽固
和厚
泉也平
張北
張家口
宣化
涿鹿
下花園
石家莊
天津
北京
平苑
房山
唐山
豐玉
豐台
大同
左雲
右玉
朔州
繁峙
五台
武寧
靜樂
太原
清源
文水
交城
石嶺
陽中
義寺
汾陽
石灰
霍州
臨汾
翼城
沁水
陽城
沃州
陸川
運城
平陸
芮城
大名
長治
邯鄲
磁縣
安新
陽泉
盂縣
平定
壽陽
晉中
祁縣
太谷
榆次
清源
平陸
作焦
閻封
宜陽
洛陽
封登
汝陽
州高
長盧
觀音堂
遵化
蘇州
三河
平閣
滦
柳江
長城
邹章
川滔
博山
坊子
安泰
蕪萊
新泰
陰蒙
陽寧
濟州
鄒城
柳泉
濟寧
菏澤
(8)
(10)
(98)
(153)
(71)
(2)
(250)
(88)
(2)
(1916)
(193)
(109)
(1054)
(1934)
(3986)
(9810)
(1954)
(6380)
(5242)
(1664)
(3145)
(1494)
(1043)
(221)
(263)
(289)
(175)
(93)
(411)
(5)
(159)
(119)
(7)
(160)
(14)
(2)
(20)
(138)
(52)
(55)
(40)
(10)
(36)
(20)
(180)
(10)
(330)
(550)
(100)
(120)
(5)
(3)
(12)
(45)
(84)
(480)
(949)
(10)
(1)
(50)
(15)
(20)
(5)
(5)
(5

鑛業投資（中間報告）

SHIPPING ADVICE # 10129 A

SACK # 1/1

ITEM # 219

3011

~~IMT 551 159~~